

教育としてのバレエの見直し

佐藤俊子

日本の舞踊教育の現状：

義務教育から高等教育に至るまで、音楽、絵画はかろうじて学校カリキュラムに組み込まれているが、同じくギリシャの昔から人間教育とは不可分に結びついている舞踊は概して疎外され、学校教育から引き離され、ときには受験勉強を口実に完全にカットされる。

その一方で、プロとして踊っていけるのは劇団四季と宝塚ぐらいと限定され、日本では生徒をとって教えなければ、バレエでやっていけないということで、日本中にバレエ教室の数はふえたが、そこでも「グラン・バレエの主役が踊れるのは東京でも5指に入る財閥の娘だけ」と言われるほど経費高のイメージを定着させている。また外国のバレエ団で堂々と踊る実力者たちは「日本と外国とでは完全に頭のスイッチを切り変えてやるしかありません」と割り切りが早い。現役を外国で終え、帰国後、恵まれないケースも少なくない。

大学とバレエの往復

筆者は幼年期から途切れることなく、学校とバレエの間を往復してきた。中でも1956年から81年までの四半世紀はペテルブルグの国立舞踊学校出身の舞姫オリガ・サファリア(1907-81)に師事し、そのバレエを継承した。

オリガが来日した1930年代はロシアにスターリン、ドイツにヒトラー、日本でも軍国主義が高まりつつあるという、世界中が平和ならざる時代であった。その上、1941年から45年の太平洋戦争、さらに戦後の混乱期などを背景に、オリガの日本におけるバレエ活動が展開されなければならなかった。29歳までのロシアにおける苦勞につぐ日本での苦勞であった。当時、東宝社長であった小林一三の誘いで、日劇に迎えられ、「日劇バレエ」の名のもとに、プロのバレエ団を作ることを夢見て1936年から57年まで奮闘したが、報われぬままに引退。1974年に開始した筆者の「オリガ・サファリア作品集」の舞台作りはかろうじて晩年の師の失意をほんの少しなぐさめただけにすぎなかった。

ひとつの文化が他国から移植されるとき、その種子の良否もさることながら、移植される側の国の文化の質が大きくものを言うものだとすることを、やがて筆者は日米の舞踊比較の研究のうちに学ぶことになった。

アメリカでは：

1991年夏、ハーワード博士の招聘により、筆者はアメリカ西部ユタ州にあるウィバー州立大学に着任した。ユタ州は全米でもダンスが盛んなことで有名な地域であり、東部ニューヨークのジョージ・バラランシンの活躍と平行して、西部ではユタ生まれのウィラム・クリステンセンがバレエの芽を育てていた。ソルト・レイク・シティがいかにか州都とはいえ、人口わずか165,000の小さな街に、バレエ、オペラ、モダン・ダンスのプロのカムパニーが常住するけいこ場つきのキャピトル・シアターがあり、シーズン制を守って上演を続けており、ユタ大学には1951年創設のアメリカ最古のバレエ学部があり、そのキャンパス内にはスタッフつきの大、中、小の劇場があり、子供のダンス教室も大学の生涯教育学部に設置されており、さらに専用の音楽堂を持つユタ・シンフォニーやプロの劇団まである、というのは日本の状況に慣らされた筆者にはやはりカルチャー・ショックであった。それにオリガの場合と同じく、ペテルブルグのバレエの種子が日本の場合と同じく、1930年代に移植されて育ったアメリカのバレエには以前から興味があったのだが、類似の種子でも、その育ち方はその種子の落ちた土壌によって大きく異なってくるものだとこのことをここで強く学んだ。「教育としてのバレエの見直し」などという発想も、筆者が西部の大学で教えた経験を通して得たものである。

アメリカは新しい国である。荒野に夢を託し、長期展望を描き、アイディアを尊び、志高い理想をかかげて前進する行動家の国である。静かな成熟や老年よりも若さが尊ばれる。伝統も歴史も浅い未来主義の国に必要なのは教育である。しかもジェファソンの昔から「すべての国民のすべての子供に公教育の機会を」という平等への強い信仰があり、独占は許されない。自己表現を熱望し、常に創造的であろうとするアメリカ人にとって、芝居もダンスも音楽も学校の正規のカリキュラムに属し、その教員を養成するには芝居、ダンス、音楽の学部や大学院が必要になるのである。

教育としてバレエを見直すならば：

もし絵画や音楽のように、学校カリキュラムにバレエが入るならば、当然、多くの子供たちがバレエを知り、バレエを好きになるだろう。正しいバレエの基礎の学習を通して、子供たちは美しい立居振舞を身につけ、心とからだの柔軟性および自分で自分の心とからだをコントロールする方法を学ぶだろう。前例にしがみついている役人のようなひ弱さから解放されて、変化を恐れない、創造的な人間となり、国際社会に不可欠の自己表現とチャレンジ精神を身につけるだろう。